

## 1997年度下半期報告書

### 目次

- 10/10～13 冬山偵察 北アルプス蝶ヶ岳～霞沢岳  
11/15～16 デポ上げ山行 北アルプス徳本峠  
12/5～7 雪上訓練 富士山吉田大沢  
12/18～24 冬合宿 北アルプス蝶ヶ岳～霞沢岳  
12/28～31 個人山行 北アルプス南岳西尾根～槍ヶ岳  
1/31～2/2 アイスクライミング研修会 八ヶ岳ジョーゴ沢  
2/3～4 日本山岳会学生部遠征隊合同山行 八ヶ岳主稜他  
2/13～15 個人山行 南アルプス甲斐駒ヶ岳  
2/18～20 個人山行 北アルプス樽池  
2/22 個人山行 谷川岳一ノ沢・二ノ沢中間稜  
2/22～24 個人山行 岩手山  
3/16～23 春合宿 東海谷～頸城三山  
その他の個人山行  
フリートーク 宗像  
                  "          小田  
                  "          野口  
                  "          松田

### 新人紹介

97年下半期を振り返って

#### ● はじめに

遅くなりましたが、新葉樹第3号を出すことができました。下半期は正常な活動もままならない状態でしたが、僕自身は大変充実していたと思っています。さいわい新入生も入りました。今年は新しい仲間と色々な山に登りたいと思います。

リーダー 宗像充

#### 1. 冬山偵察《北アルプス蝶ヶ岳～霞沢岳》

宗像、大谷、松田

10/10 晴れ

9:12 徳沢園 9:57 1900m付近 13:04 長堀山 13:16 13:55 蝶ヶ岳  
ヒュッテ

カーレースのように他の登山客を追い越しながら徳沢へ。ペナントをうちながら、なるべく稜線から外れないように蝶へと。宗像はぬかるんだ道にシューズが脱げて泥だらけだった。稜線上は風が強く、頑丈にテントを張る。

10/11 曇り時々雨

6:45 発 7:50 2305m手前 8:00 9:50 2491ピーク下 10:00 12:15  
2246.5m 徳本峠

昨夜の強風でフライがずたずたに裂け、テントも大きな穴が空いてしまった。下りたらもう使えないだろう。うっすらと白いものがついている。夏道通しに歩く。樹林に入ると同じようなピークを幾つも越える。冬はラッセルに終始するだろう。まめにペナントを打つ。珍しく足のそろったパーティーなのでガンガン進み、早めに徳本峠についた。連休というのに、この道ではほとんど人に会わなかった。

10/12 曇り時々雪

6:05 発 7:55 2428m 8:05 8:57K1手前 9:00 9:45K1 10:00K2  
10:15 霞沢岳 (以後記録不明)

天気は悪そう。ジャンクションピークまでは急坂だが、迷うところはなさそうだ。雪も積もってきて、いやな感じだが、とにかく霞沢岳に向かう。途中、冬は雪崩れそうな所が何カ所もある。霞沢岳で休憩した後、南尾根の藪の中に分けいる。最初の下りはまだまじだったが、しばらくすると、猛烈なハイマツの藪漕ぎ。時速300m位しか進まず、時間だけが無駄に過ぎていく。2553mピークとのコルでこのまま進むと今日中には下山できないと判断。引き返そうともしてみたが、下りであんなに時間がかかるのに、上りだとますます進まない。しょうがないので、今日が最終下山日なので携帯で淵沢さんに、今日帰れませんと、ライブ中継してしまった。その後も、恐ろしいほどの藪が続き、しかも雪は降ってくるし、装備が貧弱なだけに、まったく心細い。2553を過ぎた後、しばらくしてハイマツの藪が終わったときの安堵感。偵察にしては内容が濃い。樹林に入ると、雪はくるぶし程度。地図とコンパスを頼りにじりじり進む。地図上では分からないピークが連続する。尾根が痩せてきて、悪いところもある。2304手前で時間ぎれ。ぼろいテントを筐の中に張って粗末な食料を食いつなぐ。

10/13 曇り

昨日同様、地図とコンパス頼りに進むが、藪はそれほどでもないのに、結構早く進める。1936の下りで、右の尾根に入りそうになる。1695の下りも分かりにくい。藪がまばらになったころ、ようやく貯水池に飛び出した。いらいらするジグザグ道を下って、意外と早い時間に発電所に下りついた。しかし、不幸にも「あずさ」が脱線していて、東京に着くのは遅くなった。

(文責・宗像)

## 2. 冬合宿デポ上げ《島々ー徳本峠ー上高地》

喘息の発作で松田が参加できなくなったため、合宿はふたりで行うこととなり、これを受けて徳本峠までデポ缶を荷揚げすることとなった。

慣れないというより、はじめて背負う背負子に、缶とザックをくくりつけた、30kgの不安定な荷物はそれ以上に重たく感じられました。道も最悪で、島々から十数キロは林道で、はやく仕事を終えてしまおうと足早に駆けていくのでした。

ところで、よき「やまのぼり」ってなんなのでしょうか。わたしの場合は、征服感とか達成感、日常にはありえない自然や景色といったものを手にすることではなく、内的表象の移り変わりといったようなものの体験です。とりわけそれは、音楽として表現されます。洋もののロックやポップスがガンガンに鳴っているときは、よき「やまのぼり」で、そんなときに思いがけない「風景」にぶつかると、すべての音が上空に散らばって、音のなき音がわたしを萎縮させると同時に快適にさせ、静寂のなか足だけが一步一步前に進んでいきます。

さて、このときの山行は最悪でした。のっけから、どうしようもないことだけが思いめぐるのです。最近ふられたヒトや昔ふられたヒトへの被害妄想。あいすることってそれだけでも尊いものではあるのだけれども。そんな人生哲学などあとかたもあつたものではありません。気分をかえようとあいしあつたヒトとの思ヒ出に更けようとするのですが、楽しいコトなどはただ虚しくてげんなりさせられるだけでした。バカなことには、相手の父親の気分にシンクロナイズしてカノジョを心配する有り様です。そのことに対して苦笑すら発するシニカルさもないくらいに感情が摩滅していたように思い出されます。

自分は人生の敗北者なのだ、そんな気がします。たぶんだれもが夢とか目標とかもっているのだと思います。それに向かって一直線に駆けていくものもあれば、行動も起こさないままそれをあきらめるものもいるのでしょうか。歩きつつも自分の力量にあわせて軌道修正するものもなかにはいるはずです。わたしはどんな人間かといえば、なんでもないもののように思います。だいたい、おれがなにしようたって、地球は運動しヒトはなにかを感じたり感じなかったりしてるわけで。だれかが、コンプレックスに苦しもうと苦しまいと、アフリカのガキが飢えて死のうと、戦争下のドイツで上流階級の連中が異常性愛に耽ろうがそうしまいが、おれさまになんの因果があるものかい。

ですが、わたしをふりかえってみるとデポ揚げという事務を事務として平静のうち済ませることができないどうしようもない未熟児で、てなことを考えていると、足を滑らして仰向けに転んでしまうのでした。雲が空をおおっていました。めんどくさくなって、徳本峠までいくのはよして、適当なところでテントを張ることにします。腹が減ったので、明日の分のレーションなどさっさと喰ってしまおう……

次の日。デポ缶を徳本峠まで上げて、無事下山しました。こんな登山もオレの「やまのぼり」なのだろうな。

1997.11.15-16 Ohtani

### 3. 雪上訓練《富士山吉田口》

宗像、大谷、井上 OB／小林、田所、昆

12/12 曇り

冬合宿は駒沢と合同で行うことになったので、予行演習として雪上訓練を富士山で行った。昨夜のうちに富士吉田に入り、朝タクシーで馬返しへ。今日入るパーティーはいないようだ。佐藤小屋の横にテントを張り、雪上訓練に出発するが、下から見て、見るからに黒い吉田大沢。この2週間事故が続いたのが納得できる。七合目辺りで吹きだまりをひろいながらアイゼン歩行、ピッケルストップを繰り返す。佐藤小屋に戻っても今日はだれも登ってこなかった。

12/13 曇り

準備に手間取って出発すること、明治学院が登ってきた。今日は昨日の復習と

スタンディングアックス、自己脱出の練習をする。他のパーティーも登ってきたころ井上さんも登ってきた。大学が違くと教える内容も違う。今まで当たり前と思っていたものが客観化され、いろいろ考えさせられる。駒沢の1年には最初から説明する点もあったため、時間を取られ、ロープワークに関しては、一通りの技術をなめるだけに終わったようで、満足とは言いがたい。七合目辺りで、ツェルトを張ってビバーク。

12/14 雨のち曇り

何かあったかい夜だったなあ、と思ったら雨が降っていた。しばらく迷ったが、雨に濡れて頂上に行くのは避けたいので下山することにする。今年も頂上には行けずじまいに終わった。残念。

(文責・宗像)

### 【フリートーク】

環境保護と山について

小田研

自然保護に興味を持つようになって、山に登るようになった。山には原始・古代からの自然がそのままのこされたていると考えたからである。しかし自然が人間の力の加わらないありのままの状態であるというのであれば、山は完全に自然ではない。現代の世界において自然がそのまま残っていることは少ない。とはいえ、山や海において最もそれに近いものが残されているとっていいだろう。

最近の興味は自然もしくは動物の権利についてである。動物に人間の持つ人権と同じような権利があるとする考えがある。そうだとすれば、例えば動物食(肉食)はその権利をおかしている。さらには動物と植物に厳密な区別がないため、植物の権利についても考える必要が出てくる。いずれにせよ動植物、さらには自然の権利についてはこれからの人類の課題であろう。

### 4. 冬合宿《蝶ヶ岳〜霞沢岳》

CL 宗像 (3年)、SL 小林 (駒沢3年)、大谷 (4年)、昆 (駒沢1年)

12/18 小雪

4:30 松本発～5:25 中ノ湯 6:05～7:05 大正池 7:20～8:00 上高地バスターミナル 8:10～9:05 明神手前 9:15～9:40 明神～11:20 徳沢＝12:00 偵察発～12:45 引き返し点～13:00 徳沢

松本からタクシーで中ノ湯温泉まで行く。雪はほとんどない。拍子抜けしつつ、釜トンネルをたらたら歩いていく。が、トンネルを抜けると、うっすらと白いじゅうたんが敷き詰められていて、河童橋につくころには自然と一列になってラッセルを組むようになっていた。上高地からは、それまでのやおたげな雰囲気から一変して、水を多分に含んだ雪を相手のハードなトラバユとなる。河川敷沿いを進む二人のスキーヤーを横目に、明神までラッセル。徳沢に着いたときには、みぞれの降る曇天で、明日の天気が雨にならないかが心配された。

12/19 晴れ

5:20 起床 7:05 発～9:00 1960m 9:05～10:00 2060m ～11:05 2200m 11:15～13:15 2415m 13:25～14:00 2560m

この日の予定は、徳沢から妖精の池まで約 1100mの行程。さぞしんどくなるかと思いきや、同じ行程の単独行の登山者がいて、かつペースも同じくらいの抜きつ抜かれつ歩みだったものだったから、私たちの先頭での歩行距離は半分ですむことになった。降雪はなく、ルートのにも困難はなかったけれども、予定ほどには進まず、夏時間でヒュッテまで 40 分くらいの妖精の池手前でテントを張ることになった。

12/20 晴れ

5:00 起床 7:05 発～8:00 蝶ヶ岳 8:15～11:20 2625m手前 11:30～12:25 大滝小屋 12:35～14:45 2330m

ハイマツに足を取られながらくたくたになって蝶まで登る。次のピーク (2542m) 手前の下りは、誤りやすいので注意しなければならないが、先頭の小林は案の定、誤った方角に進む。大滝山荘からは延々と針葉樹の中を 30 から 40 センチの雪をラッセル。2330mの地点までいい調子でいき、昨日の遅れを挽回することができた。

12/21 曇り

5:00 起床 6:40 発～7:30 2250m手前 7:40～8:25 槍見台手前 8:35～10:25 明神見晴 10:40～11:35 2246m 11:45～12:15 徳本峠＝12:50 偵察発～13:00 引き返し点～13:55 徳本峠

昨日同様、曇りの天気の中、針葉樹の中をラッセルする。問題となる所はなく、楽勝で徳本峠に着く。11月に荷揚げしたデポ缶と荷物を小屋に置いた後、宗像と小林が明日の行程のラッセルをつけに行く。下界では伊丹十三が自殺したとのラジオの報。クリスマスが近くなって、ユーミンの“友達はサンタクロース”がしばしば聞かれるようになった。

12/22 晴れ

5:00 起床 6:45 発～10:00 コル

秋には1時間で行った2428mのピークまでが実に遠い。ここまで一日のロスもなくきたので、休息の意味も込めて正午前に行動を打ち切った。テントの中では、小林の講談の独壇場で、東北本線と宇都宮線という呼称をめぐる栃木県と東北地方の各県との確執（栃木県の反対で黒磯までは宇都宮線になったそうだ）についてなど、ためになる話を楽しく聞かせてくれた。今日に始まった話ではないが、足から発せられる臭いが強烈だ。

12/23 晴れ

5:00 起床 6:40 発～8:40 K1 手前 8:50～10:21 K1～11:20 K2 11:30～12:00 K3 12:15～13:00 K1 直下 13:20～14:00 コル

いよいよ霞沢岳アタックの当日である。正午までに山頂に着けなければ敗退することを事前に決定していたので、僅かながらも緊張感がはしる。K1前のピークまでは雪の付き方が悪く消耗する。昆はすこしバテた様子でペースが遅れる。K1のからの下りは、アイゼンを履き、ザイルを張る。先頭の小林は固定に時間がかかりすぎる。昆は岩場でのアイゼン訓練を経験していないため、岩にアイゼンをかけて登れない。そんなこんなで時間は急速に経過し、K2ではすでに12時をまわっていた。が、登頂を強行。K2以降は順調で、今後一生足を運ぶことはないであろう霞沢岳のピークを踏む。握手で祝福しあう。

下りはハイ・ピッチで歩く。雉打ちのときピッケルを外した大谷はそれを忘れて15分くらい行ってしまいますほど (!!）、危険な心証の少ない行程であった。

12/24 晴れ

5:00 起床 6:30 発～7:20 ジャンクションピーク 7:30～8:05 徳本峠 8:30～9:35 明神 9:45～10:35 上高地バスターミナル 10:45～11:25 大正池 11:40～12:00 中ノ湯

徳本峠でデポ缶を回収して明神まで下りる。道でないところをギャーとわめきながら尻セードで滑ったりする。明神付近では、今流行のスノーシューの踏み

跡で雪が固められている。雪はかなり溶けていて上高地までの歩きが楽。冬合宿というよりも春山山行だった。

(文責・大谷)

### 【フリートーク】

ひしゃく

国立の空では、夜が更けても

ひしゃくがどこか分からない

小川山の空では、夜が更けるほど

ひしゃくがどこか分からない

俳人 のぐち

### 5. 個人山行《南岳西尾根一槍ヶ岳》

宗像、古瀬 OB、古田 OB

12/28 雪のち曇り

10:40 新穂高温泉発～11:20 穂高平 11:35～12:15 白出小屋～13:30 滝谷避難小屋 13:45～14:30 槍平

冬合宿もあっさり終わってしまったので、対岸の槍に転戦。今年開通した安房トンネルを通過して新穂高へ。車掌の要領は悪いが、やっぱり近い。雨の中新穂高を出発。車道にうっすらと雪が積もっているくらいだが、トレースは槍平まで続いていた。穂高平で古田さんがもってきたショートスキーを試していたが、あんまりいい乗り心地ではないようだ。車道から山道に入ると、古瀬さんが鬼のように早くなる。汗をかきかき、槍平に到着。10以上はテントがあった。夜、古瀬さんが吐いていた。

12/29 晴れ

5:00 起床 6:40 発～8:00 最低コル 8:15～9:10 デルタ岩壁下台地 9:30～10:30 デルタ岩壁直下 10:50～13:00 2632m峰 13:20～14:15 マッチ箱



手前 14 : 35 ~ 16 : 30 南岳小屋

いい天気だ。傾斜が緩くて雪崩れそうもない沢をトラバースしてルンゼに取り付く。藪だ。ルンゼ中央をひざまでのラッセルをして右側のあまり顕著でない鞍部にあがる。昨日絶好調だった古瀬さんはえらいバテていた。後でわかったことだが、一昨日食べた牡蛎にあたっていたようだ。稜線上も藪でいらいらする。デルタ岩壁下は急なルンゼになっていて降雪直後はかなりやばいだろう。胸をつくラッセルで右の稜線に上がる。そこからハイマツの藪を岩壁基部まで。残置のフィックスをたどって岩壁の基部でアンカーのセットをしていると、後から上がってきた古田さんが、「要らないよ」というから、結局ノーザイル。登ってきた古田さんを見ると、輪かんをつけたままだった。一応Ⅲ級だろ。それから後は変化のない稜線を上っていくが、徐々に稜線は細くなる。調子の悪い古瀬さんは遅れ気味だ。マッチ箱手前でテントを張れそうだが、明日の天気は崩れるという予想だったのでそのまま突っ込む。マッチ箱は宗像トップで馬乗りになって通過。その後のナイフリッジにもう 1 ピッチ出して通過。その後も痩せた稜線が続く。天気よく、滝谷や隣の南西尾根がバッチリ見える。笠をバックに最高のクライミングだが、古瀬さんは苦しそう。プラトーに上がる所もあまりよくない。それを登り切ってしばらくすると、南岳小屋が見えた。変化のあるいいルートだと思う。

12 / 30 雪

5 : 00 起床 7 : 00 発 ~ 10 : 30 肩の小屋

風が吹き荒れているが、視界が 50m ほどあるので出発する。雪も吹き付けてきて、視界不良のため、現在位置がいまいち判然としない。気温が低く、ゴーグルが凍りつく。慎重に地図を見ながら進み、満員の肩の小屋に入り込む。中は別世界で、暑くて眠れなかった。古瀬さんは今日も調子がよくなかったようだ。天気図では二つ玉ができていたらしい。

12 / 31 雪のち晴れ

4 : 30 起床 8 : 35 発 ~ 穂先往復 ~ 10 : 30 肩の小屋 11 : 05 ~ 12 : 35 槍平 ~ 13 : 50 白出沢 14 : 05 ~ 15 : 15 新穂高温泉

天気は急速に回復するようなので、しばらく待機する。風が強いが穂先に向かう。沈を決め込んだ信州大学山岳部はまだ寝ていた。槍の穂先はハシゴ下が雪壁になっていて 2P。だれもない穂先でようやく視界が晴れてきた。北鎌を登ってくるパーティーが見える。小屋ではさっきまでゆっくりしていた信州大学

が出発するようだ。下りでも2P出して小屋に戻り、撤収をして出発。大喰岳西尾根を下る予定だったが、飛騨乗越まで来たところで、まあ、しまっているよだから西尾根までトラバースするかと、歩き始める。が、しばらくすると、名残惜しそうに右を見ていた古田さんが飛騨沢を下り始めてしまった。誘惑には勝てないらしい。昨日、記録を見ながら、「このパーティーよく雪降った後に飛騨沢下りるよなー」とか言ってたわりには、とてもうれしそうだった。一応、トレースがついていたが、びくびくしながら宝の木までたどり着く。暑いから、上着を脱いで、バッチリトレースのついた道を、槍平まで駆け下りる。白出沢で古田さんが所属していた登研のパーティーに会った。表銀座から槍まで縦走してきたらしい。古瀬さんがアイゼンをつけたままなので聞くと、プラグツにひびが入ったという。恐ろしいことだ。林道の下りは、古田さんがショートスキーで雪まみれになりながら下る横をてくてく歩いていった。新穂高温泉に着き、平湯温泉でふろに入った後、その日のうちに東京に帰った。まったく、便利なものだが、当日に予約をすると電話をたらい回しにさせられる。

(文責・宗像)

## 6. 日本山岳会アイスクライミング研修会《八ヶ岳赤岳鉱泉定着》

宗像ほか

### 1/31 晴れ 記録不明

真夜中に美濃戸口に車で着き、全く集合時間に間に合わない時間に出発。予定通り遅れてついた。たいして怒られないのでゆっくりテントを張っているとやっぱりどなられた。今日はジョウゴ沢で練習。下のほうの滝でフラットフティングの練習をした後、上のほうに移ったが、滝が埋まっているのでみんなでスコップで掘り出した。トップロープで上り下りの練習をしたり、スクリューをうったり練習をした。初めてするアイスクライミングは結構おもしろい。

### 2/1 晴れ

今日はジョウゴ沢のナイアガラに行って、懸垂下降、中間支点を取る練習をしたりした。自分が打ったアックスに体重をあずけるのはちょっと勇気がいる。早く実践で試してみたいものだ。夜は鉱泉でミーティングをした。もともと何も知らないもので、何でもためになった。その後、上智のテントにみんな集まっ

て、農大の安齊の熱い話にみんな聞き入っていた。不覚にも酔っ払ってテントを飛び出してはいてしまった。

## 2/2 晴れ

今日は中山乗越の方へ行って、ビーコンの練習と搬送の練習をした。二日酔いで全く集中力がなかったが、両方ともしたことがなかったのでいい経験になった。鉱泉に戻ると、金髪、ピアスクライマーとして有名な関西学院の長岡が来ていた。アイスクライミングはおもしろいと思った。実践で試してみたい。

## 7. 遠征隊合同山行《八ヶ岳赤岳鉱泉定着》

宗像、蛭田（早稲田）、栗谷川（法政）、太田（上智）、山梨（東海）、榎並（慶応）、小林（駒沢）、長岡（関西学院）

## 2/3 晴れ

4:00 起床 5:50 発 7:30 赤岳主稜取り付き 10:50 赤岳頂上小屋 11:30 12:00 行者小屋手前 13:00 13:45 赤岳鉱泉 / 14:30 太田下山

ブータン遠征隊の結成式として、みんなで赤岳鉱泉に集まることにした。みんなの登り方を見るために、そろそろ赤岳主稜に取り付く。小林とアンザイレンするが、やっぱり、クライミングの場数がロープワークに関係するようだ。主稜自体はY字のルンゼから取り付いたが、最初のほうでちょっとバランスがいるだけで、それほど問題はなかった。スタカットで進んだが、中間支点はあまり取らなかった。帰りに、行者小屋の前でビーコンと搬送の練習をして鉱泉に戻って、やっぱり今晚も飲んだ。

## 2/4 曇り時々雪 記録不明

あまり天気がよくないようで、コンテやタイトロープの練習をした後、みんなで中山乗越を越えて、南沢大滝のとなりの滝でアイスの練習をした。すぐに落ちる宗像、何回やってもピックがうまく刺さらない長岡、氷に張り付いているわりにはなかなか落ちない榎並、黙って登る栗谷川とスタイルはさまざまだった。

ルートは1本しか出れなかったが、やっぱり日頃登らない人と登るのは刺激があっっておもしろかった。ブータンが楽しみだ。

（文責・宗像）

## 8. 個人山行《甲斐駒ヶ岳黒戸尾根～七丈小屋（敗退）》

宗像、太田（上智）

2/13 曇り

5:00起床 6:05 竹宇駒ヶ岳神社発～14:30 五合目小屋 14:45～16:15 七丈小屋

赤石沢奥壁中央稜に登るつもりで出発。古いトレースに足を取られ苦勞する。いいかげん飽きてきたころ七丈小屋につく。拓殖大OBの上岡さんとG登攀クラブの吉田さんがトレースをつけてくれたようで、お礼を言う。むちゃくちゃ快適な山小屋。

2/14 雪 記録不明

天気は悪いがとにかく出発。風強く、アプローチの途中で登る気力が失せてしまう。昨日上岡さんたちがつけてくれたトレースは消えていた。岩小屋からは急な斜面をトラバースして取り付きを探す。視界がよくないから、どれが取り付きか全く判然としない。諦めて小屋に戻る。太田と二人の寂しいバレンタインデーは、小屋に置いてたちびまるこちゃんを読んで過ごした。

2/15 雪 記録不明

朝から30cmほど降り積もり、雪崩を警戒して下山。残念。下りてくると車は雪帽子を被っていた。

（文責・宗像）

## 9. 個人山行《北アルプス梅池山スキー》

宗像ほか多数

2/18 曇り

早稲田の浜谷さんの企画で、他の大学の人と早稲田の山小屋から山スキーをすることになった。全員でリフトの最上部まで行って、早稲田の山小屋に入る。入ってびっくり、山小屋とはとても思えず、その辺の安旅館よりよっぽどいい。テレビ、オーディオ、個室、何でもそろっている。今日はみんなでゲレンデで滑る。1年ぶりに滑るスキーは、やっぱりうまくなっているはずもなかった。

2/19 晴れ

昨夜、多少の積雪があったようだ。乗鞍まで行くつもりで7人で出発。天狗原手前の斜面は適度にしまっていて、滑るにはよさそう。シールを忘れて壺足で上って来た横国の新津が疲れていたのも、天狗原で引き返すことにする。休憩するとなぜか横国の菅波さんのザックからビールが出てくる。つまみもどっかからとびだし、朝からみんなで飲んでしまった。下りは予想通り、転びまくった。多少昨年よりうまくなってるかもしれないが、もっと練習が必要だろう。ゲレンデに戻って、浜谷さんに上級者コースに連れて行かれ、またまた転びまくった。兼用靴ほしい。すぐとなりでやってるオリンピックをテレビを通して観る。

2/20 曇り

天気はよくなさそうなので、そのまま下りることにする。浜谷さんの車はバッテリーが上がっていて、すぐには出発できなかった。スキーもできるクライマーを目指してやってきたが、先は長そう。金ができればゲレンデで練習しよう。早稲田の山小屋は最高だった。

(文責・宗像)

### 【フリートーク】

今だから本当のことを言っちゃおうと、新歓対策として、名前だけ貸すつもりで山岳部に復帰したのだが、その甲斐あってか(多分ないけど)1年生が入ってくれてとても嬉しい。

このような中途半端な部員が、部にとってメリットになるのだろうかとちょっと悩んでみたりもしたのだが、あまり深く考えずに出来る範囲の事をやっていけばいいのだろうと思う今日この頃なのです。

そんなわけで、僕は僕なりに山に登るのはすごく好きなので、一緒に頑張っていきましょう。

(文責・松田)

### 10. 個人山行《谷川岳一の沢・二の沢中間稜》

宗像、太田(上智)

2/22 晴れ

4:00 起床 5:40 土合駅発～7:30 一ノ倉沢出合～13:00 ピナクル過ぎたところ～14:15 トマの耳～14:25 オキの耳～15:10 肩の小屋発～16:25 ロープウェイ乗り場

一ノ倉沢に行く予定だったが、甲斐駒を敗退したので慎重になって中間稜へと。出合に立つと夏のどよどよした雰囲気とは違い、一ノ倉沢は最高にかっこいい。デブリをぬってテールリッジへと続くトレースをたどって尾根の末端から取り付く。下のほうは雪が少ないせいか、尾根上は藪がでていて、二の沢側を詰めることが多い。我々のほかに2パーティー先を歩いている。小コルからの下降は左へ懸垂10m。そこから左のルンゼ沿いに登る。灌木の多い斜面からトラバースして稜上にでてアンザイレン。スタカット数ピッチでテラスに出る。他のパーティーをすべて追い越し、ここでやっとトレースをつけられると思ったら、左方ルンゼを登って来たパーティーが現れて、先に行ってしまった（後で広川健太郎のパーティーだったことが分かった）。小ピーク下は右のルンゼを詰めたが、ラッセルで地面が露出してあまりよくない。いよいよ核心部だが、広川健太郎がノーザイルでトレースをつけた後でスタカットでうかうかたどるのはまったく緊張感がない。第一岩峰は右側を巻いて、雪庇もなく、オキの耳に飛び出す。珍しく晴れた谷川の稜線上、肩の小屋でゆっくりお茶を飲んだ後、西黒尾根を下降した。

(文責・宗像)

### 1 1. 個人山行《岩手山》

大谷 (4年)、湊沢OG

2/22～24

地図に記録をつけたいのですが、引っ越しの慌ただしさのなか、行方不明となっていました。記憶に残る、大変おもしろい山行だったので、記録を残すことができず、残念です。記録を見つけしだい「針葉樹」に投稿できたらと思います。

(文責・大谷)

## 12. 春合宿《東海谷～頸城三山》

宗像、奥山（千葉大）、藤田（千葉大）

## 3/16 晴れのち雪

6:50 砂場発～7:20 最後の民家～12:10 1012ピーク～15:40 烏帽子岳手前のコルT S

今回は、同様に人数不足の千葉大学と合同合宿とした。直前に硫黄尾根から海谷へとまったく毛色の違う山域に変更した。一人で部室でできあがって上野に向かった。駒沢の小林が見送りにきた。ありがとうございます。糸魚川に着くと、昨日買った1000円の時計がもう壊れていた。最悪だ。全く雪のない糸魚川からタクシーで砂場へと。くるぶし辺りまで積もった車道を歩いて最後の民家まで。そこからは、田圃の中を鉄塔を目指してダブルボッカ。太ももあたりまでである。しばらく行くと再び田圃の雪原状になり、雪もしまっている。かなり古いが、輪かんの跡がある。眼前に真っ白な烏帽子岳が座っている。尾根の取り付きは左から急登を上り、再びダブルボッカ。膝あたりまでもぐる。1012手前で雪壁状を通過するが、雪庇は発達していないので問題ない。この辺りから雪もしまってくる。烏帽子岳までは主に右側をトラバース。一カ所、稜線が雪庇状になっているので宗像がスコップで突き崩して通過。雪が舞ってきたので予定通り烏帽子岳の手前にテントを張る。千葉大はテントの中に銀マットを敷かないそうで驚いた。ザックもテントの中には入れないそうで大学によっていろいろ違うんだなあとと思った。

## 3/17 雪

6:30 T S 発～14:30 阿弥陀岳北峰手前の雪壁状

ガスで視界が悪いが、風はそれほどでもないので出発。烏帽子岳の上りは降雪直後はナダレそう。視界が悪いのでどこが頂上かよく分からない。中途半端に雪が少ないので、時々藪が出てて、それを避けるために右下を巻いたりするが、ほぼ稜線上。烏帽子岳からの下りはセツピになっているように見えたので、右の支尾根に入ったが、これは間違いで上り返し、後ろ向きで左の尾根に降りた。阿弥陀岳への上りは、やっぱり降雪後はナダレそう。尾根が西へと方向を変える手前、尾根が雪壁状だったので右にトラバースしてルンゼに取り付くことにする。が、これが失敗の始まりだった。藤田君のリードで取り付いたが、難しいということなので、宗像に交代。最初は雪壁をラッセルするだけだが、次に

アイスとのミックスになり、急傾斜の雪壁に変わり、アックスも決まらず、所々生えていた灌木もなくなると、なかなか足が上がらない。むちゃくちゃ渋い。それでもなんとかじりじりと進み、45mいっぱいようやく稜線直下の灌木でアンカーを取る。次に取り付いたのは奥山さんだが、ビレーポイントまで15m辺りまで来たところで、まったく進まなくなった。何回かトライしているが、進まないの声をかけてみると、アイゼンが片方外れたらしい。下の方に声をかけると、藤田君が落ちたアイゼンを見つけたらしい。いったん、奥山さんが降りることにしたが、今度はユマールがバッチリ食い込んで外れないらしい。天気がどんどん悪くなって、寒さも増すし、だんだん悲壮感が漂ってくるが、ユマールを切り離すナイフがすぐでないという。仕方なく、宗像のナイフをロープ通しに落とすが、途中で木に引っ掛かってどうしようもない。ロープをフィックスして宗像が奥山さんの所まで降りようとするが、ロープが張っていて、懸垂できない。手が尽きたかと思ったが、もう一度ロープを振るとナイフがようやく落ちてくれたので、それで奥山さんが脱出。ここはフィックスしても上り返すのは難しいだろうということで、最後に宗像が2回懸垂をしてロープを回収。やれやれ。時間も遅いので、左のほうに戻って雪洞を掘り始めたが、1m掘ると木の根っこが出てきて、もう一度最初からやり直し、おまけに奥山さんが共同装備のテルモスを落とすし、もう、最悪。やっと雪洞に落ち着いたが、寒い夜でした。

3/18 曇りのち晴れ

6:50 発～13:40 鉢山手前 T S

寝過ごす。昨日の雪で15cm程積雪あり。昨日の教訓を生かして稜線上を忠実に行く。木登りから雪壁へと1P。藤田君の手が感覚がなくなってきたというので、宗像の手袋を貸す。その間に奥山さんはさっさと先に行き、何のためらいもなく、北峰の肩からコルへと降りてしまっていた。もし、北峰に行っていればロープを数ピッチ出したろう。残念。コルからワカンを出し、南峰への上りは、腰位までラッセル。ここも、雪崩の危険が考えられるが、宗像一人でガンガン上って行ってしまった。肩から南峰まではすぐそこだが、馬乗りのナイフリッジから、お立ち台の頂上へとロープを出す必要があり、先を急ぐ。ここからの下りがまた雪崩れそうで、実際、足を踏み出すと表面が崩れて下のほうでデブリになっていた。一人ずつ通過することにするが、太もも辺りまで潜り、下りでもなかなか進まない。鉢山まで小さなアップダウンが続くが、自分たち



のつけたトレースがずっと後ろの方まで続いていて、ちょっとうれしい。鉢山手前まで来て、右は急な藪。左も先が見えず、地図上では雪崩れそう。奥山さんは右の斜面を下の方からトラバースしよう、というが、宗像が非常に渋ったので、少し早い雪崩の危険を考えてここにテントを張る。その間、宗像と藤田君が正面の藪斜面を偵察。ロープを出して2カ所ほど上ってみるが、右の方は藪が深く、荷物が大きいと苦しいだろう。正面の方は、ルンゼ状だが結構渋い。結局、雪が落ち着いたときに右の斜面をトラバースするのがベターのようだ。

### 3/19 晴れ

5:50 T S 発～7:00 支尾根上～12:10 窓～15:00 鉢山-昼闇のコル

撤収中テントの中身を全部出したところで風でテントが下の斜面に飛ばされてしまったが、何とか駆け下りて行って奪還。油断大敵。奥山案のミトンがなくなかったので、宗像の予備を貸す。宗像のトイペも落としてしまった。出だしから問題が多い。問題の斜面に取り付く。トラバースにロープを1P出すが、トレースをつけた後は、最後まで届かないのでロープを回収して、トレースをたどる。支尾根に取り付いた後は主に右側を上って行くが、モナカになっていて歩きにくい。痩せ尾根になってきたのでロープを出す。1P行った所から下に降りて岩壁基部をトラバースできそうでもあるが、そのまま稜線上を忠実に行く。2P目は雪壁状の尾根。3P目、両側が切れ落ちたミックス状の痩せ尾根を奥山さんリードで取り付く。アンカーもあまりしっかりしていないし、中間支点も取れないため、見ていてはらはらする。むちゃくちゃ渋い。その後、4P、主に雪稜で窓へ。窓から少し戻った倒れた灌木で懸垂1Pいっぱい窓に降り立つ。そこからⅢ級程の岩を上り、いったんロープをしまう。しばらく行って再び出し、馬乗りになって通過。もう1P延ばしてようやく頂上へ。この間、中間支点は全く取れず。そこからの下りは雪がグサグサで下りにくい。転がった雪玉がアンモナイトのようになっている。下りきったところで泊まることにする。どうやら天気は下り坂のようだ。

### 3/20 雨

台風並みの強風のため停滞。フライを飛ばされ、テント内浸水。

### 3/21 霧

5:50 発～14:50 富士見峠より少し焼山方向 T S

朝から視界はない。地図とコンパスを頼りにじりじり進む。真っ白で平衡感覚

がなくなりそうになる。昼闇からの下りで視界2、30m程で偵察を出しつつコンパスだけが頼りになる。そこからは左側が切れているので、それを目印に進むが、なかなか自信がなく、いらいらしてきたところで、ようやく焼山が見えた。焼山の近くで振り返ると雲海が広がっていた。こういう仕掛けか。谷間状のところを詰めて焼山基部へ。こんなすばらしい景色を独占していいのだろうか。

### 3/22 霧

5:20TS発～5:40焼山手前のピーク～10:00影火打～10:40火打～13:00黒沢ヒュッテ

視界は効かないが、とにかく出発。しばらく上るとプラトー状になり、焼山を見つけて再び上り始める。どこを上っても同じようなので左のほうから詰めたが、結構渋く、正解は正面のルンゼ状のところだったらいい。さすがに登山禁止になっているだけに火口のほうではぐつぐつ音がしているので、早く降りようとするが、この下りも視界が効かず、コンパス頼りに慎重に下る。この辺かなあ、と思った所で視界が開け、右に方向修正してキレットに降り立つ。そこから先は迷うことは内が、晴れていれば最高の稜線散歩なのになあ。どうでもいいような火打を過ぎ、いかげんうんざりしてきたところでようやく黒沢ヒュッテに着き、小屋の横に雪洞を掘って泊まる。

### 3/23 晴れのち曇り

6:30発～10:30妙高山頂～13:30赤倉スキー場

今日も浮かない天気だが出発する。大蔵乗越まではそれほどもぐらなかったが、外輪山上はかなり吹きだまっている。弱層テストをするとあんまりよくない。小尾根をたどって下りることとするが、途中から右の斜面に入るしかなく、上から見るとずっと右の方にトラバース道らしきものが見えたので、それを目指して斜面をトラバースすることにする。しかし、この判断はよくなく、目の前をさらさらと雪が崩れ落ちるのを見て途中から下のほうに下りてしまった。最初から下を目指して下ったほうがよかったようだ。お釜を詰めて、樹林の中をようやく山頂へ。このころになってようやく天気がよくなってきた。昨日通った焼山はもくもくと煙をあげていた。写真を撮りまくって下山にかかる。途中でいよいよわしたところが出てきたのでそれを避けるために左の方の雪面を下ろうとして、宗像先頭で下りて行ったが、斜面が急になった所で足を踏み出すと斜面が横にスパーンと割れて足元から雪崩がいった。足は取られなかったが間一

髪、オシッコちびりそうになった。新雪の落ちてしまった斜面を下りてようやく尾根に戻った。そこから先は再びガスが出てきて、地図を見ながら進む。休憩をしているとガスが晴れてきたので来た道を振り返ると、さっき起こした雪崩が200m位下まで崩れ落ちていた。うーん。最後のピーク手前でバックカントリースキーを楽しんでいる人を見たのが一週間ぶりの人間だった。赤倉スキー場へシュプールをたどって下り、リフトを乗り継いでようやく人里へ戻ってきた。

(感想) 今回の合同合宿は宗像と奥山さんの二人で決めたような所があり、事前の準備や用意の点でいかげんなところがあったのは否定できない。それは、合宿後にOBに指摘された所でもあるし、合宿中においても、僕の判断の悪さは申し開きのしようもないが、そこにコミュニケーションの悪さや危険への考え方の違いがあったということも事実だろう。とはいえ、今回の合宿は雪への判断という点で総合的な力が試される所であり、非常にいい経験になったと思う。

(文責・宗像)

### 《13. その他の個人山行》

11/12 奥武蔵・河又の岩場 宗像、太田 (上智3)

11/16 湯河原幕岩 宗像、太田 (上智3)、遠藤 (上智2)

11/24 湯河原幕岩 宗像、井上OB、他11名

1/10 湯河原幕岩 宗像、太田 (上智3)

山野井泰史・長尾妙子夫妻にトポを見せる。

1/17 城ヶ崎海岸 宗像、太田 (上智3)

全く登れないシーサイドエリアで打ちのめされて帰ってくる。

1/28 広沢寺 宗像、太田 (上智3)

アイゼントレーニング

2/24 日原白妙橋 宗像、太田

3/4 日原白妙橋 宗像、太田

3月のある週末 湯河原幕岩 大谷、宗像

3月末のある平日 湯河原幕岩 宗像、縄田 (学習院3)

3月末のある平日 奥多摩石尾根 宗像

カモシカ山行をするつもりで奥多摩駅を出たが、やっぱり雪があって運動靴のため500m登って引き返す。

3/28 奥武蔵・河又の岩場 宗像、井上 OB

### 【フリートーク】

#### 合同合宿についての一考察

昨年度の部員不足の結果として他大学の山岳部と合同合宿を行う機会があった。富士山の雪上訓練、冬合宿について駒沢大学と、春合宿について千葉大学と合宿を共にした。これらの山行の経験から、合同合宿を行うことのメリットと反省点について考察してみたい。

合同合宿への流れ……今回の合同合宿の場合、日本山岳会学生部で知り合った駒沢の小林と千葉大の奥山さんとの個人的なつながりのもと、リーダー間で合宿が決められ、少ないながらも他の部員を含んで合宿を実行した。合同合宿を行う相手として特定の大学が決まっているわけではなく、どちらかという、双方の大学の部員不足への対応への結果として、また、個人どうしの利害の一致の結果として合宿が行われたのである。もっとも、一番の部員不足に悩んでいる僕が積極的に働きかけて合宿を実現したのも事実である。

責任問題について……他大学と合同合宿する場合、つまり違う山岳会に所属しているものどうしが山行を共にする場合、まず最初に問題になるのが事故時の責任の所在である。合宿を行う個々人が山岳部に属している以上、しかもその山行が合宿として行われる場合、事故が起こった場合、どちらかの山岳部・OB会に対して管理責任が問われかねない。もちろん、合意の下にリーダーを選んで合宿を行うのであるから、自己の責任を取るのは最終的にはリーダーということになる。しかし、事故の捜索、対応、費用の負担について所属する山岳部が一定の義務を負うのであれば、実際に事故が起こった場合、所属していないパーティーのメンバーへの対処があいまいになる。また、いま挙げたような義務をどちらの山岳部・OB会が負うのかについても明確でない。今回の3回の合宿では、こういった問題に対して事故時の緊急連絡網を作成し、連絡体制の面での混乱を避ける手段をとった。しかし、それ以外の点ではまったくあいまいにしてしまったのも事実である。結果的に事故が発生しなかったからよかった

ものの、事故ははっせいしうるものであるという前提に立つ以上、今言ったようなことについて合同合宿であろうとも何らかの取り決めに事前に行う必要がある。

合宿の組み方について……先にも述べたとおり、3回の合同合宿はリーダーどうしの個人的なつながりから合宿を成立させたという背景がある。もちろん双方のリーダーは部の都合を考えて合宿を組むことを考えるのであろうが、双方の部の恒常的なつながりが無い以上、他の部員にとっては唐突な感じを受けたであろうし、相手の実力が分からない中で雪山に入ることにについては不安があるだろう。そのような状態でパーティーを組むべきではない、という意見もあるかもしれない。実際、冬合宿についてはいったん一橋二人で行う予定だった合宿を駒沢を含めて行うことにし、それに対する僕の説明が不足していたために、もう一人の部員から山行前に批判を受けることになった。(山行前に話し合いを行う) また、春合宿については合宿後にOBに個人山行として行う性質のものを合宿として行ったのではないかと指摘された。こういったことは、日頃から交流があり、山行についても一緒に行うことが多いのであれば問題にならないことである。しかし、部を挙げてそのような接触を保つことは難しいことであり、しかも、春の僕のように合同でなければ合宿を行うのが難しいという状態であれば、選択の幅は限られるのである。合同合宿を行うためにはパーティーとしての一体感を作り上げる必要があるのかもしれないが、それは、もはや部員が入らないという前提の下、部としての合宿を遂行することを放棄することにもなり得るのであるし、二律背反である。結局、合同合宿というものが、部員不足に対する窮余の策に過ぎないのであれば、不完全な形でもメンバーシップというものは避けられないのかもしれない。これは合宿内での意思疎通がうまくいかないことや不満につながる。これを改善するには、日頃から個人個人がネットワークを広げ、他大学の山岳部員とも積極的につながりを持ち、山にも行くしかないのかもしれない。

合同合宿のメリット……今言ったように合同合宿についてはいろいろな問題がある。それら一つ一つをあいまいにしておけば、もしものときの混乱につながる。しかし、部が違うということはそれを事細かに取り決めていくということ物理的にも(大学が離れている、ミーティングがもちにくいなど)、性質的にも合同合宿そのものを否定する程のものではないと思う。まず、合同合宿は一時的なパートナー不足を解決してくれるという点で、効用がある。何も、大学山

岳部でなくてもパートナーは得られるであろうが、大学山岳部であれば大体似たようなことをやっているという前提が多かれ少なかれ持てるので、パートナーに対する不安は相対的に少ない。また、そういう前提に立ちつつも、他大学と合宿を共にすることによって自大学の山岳部を相対化して見ることができる。やはり、大学が違えば、安全に対する考え方から幕営の仕方まで違うのである。今までやってきたからそうしているということが言えないのが合同合宿である。結果としてよりよい登り方を考えることができると思う。もちろん、今言ったようなことが自大学の山岳部でできれば一番よいであろう。しかし、完全に閉じられた組織では、なかなかそうするのも難しいであろう。一般に、部員が多い組織は、自分たちだけで今言ったようなことが賄えるので、外に交流を求めることにあまり熱心ではないように思える。結論として、自大学の山岳部だけで何でも済ましてしまうよりは、合同合宿であれ何であれ、外に交流を求める方が僕の経験上、有益だったということは言える。部員数の大小にかかわらず、積極的に他大学の人間と登ることは十分考えられることである。人数がいるときといないときとは大きな差があるのである。

## ● 新人紹介

小田研

京都府出身、彼はホルン吹きでもあり管弦楽団も兼部している。丸刈りの丸顔でまるめがねということもあり、見た目東条英機に似ているが、多分東条英機はこんななにをやけた男ではなかったと思う。雪上訓練最終日の奥穂往復→上高地でばててしまい、終バスに間に合わず、次の日がゼミの発表でいらいらかりかりになっていた私を死んだ魚のような目で見つめていた彼が忘れられない。寮生の先輩に連れていってもらった国分寺のヘルスが忘れられないらしくよく部員を誘っているが、無関心な人間と満ち足りた人間しかいない山岳部員でヘルス仲間を作るのはかなり難しそう。

野口和寛

滋賀県出身、サイクリングサークルにも顔を出している非さわやか系アウトドア派に属する。部員の少ない我が部にあって、“マネージャー”というもつとも

らしい役職の専業である彼ではあるが、岩登りはする。聞くところによると高いところは苦手であるらしいが、先日は宗像と一緒に小川山に岩登りに行っていた。高いところが苦手な彼が岩登りに何を感じてきたのか詳しく聞いてみたいところである。また、サービス精神が非常に旺盛でお酒をたくさん飲ませてくれた人には漏れなくストリップダンスを披露してくれる。

久田英一郎

福岡県出身、山岳部に体育会の厳しさを求めて来た彼ではあるが、ピッケルで追い回す先輩がいるわけでもなく、重過ぎる荷物を背負わされるわけでもない我が山岳部に若干失望しているようである。ポーカークフェイスで酔っても疲れてもいつもさわやかに微笑んでいるが、雪上訓練の13時間行動はさすがに応えたく、笑顔で“最終日くらいはのんびりしたいですね”などと言われてしまった。技術習得に対しても、体力増強に対しても熱心に取り組んでいる彼ではあるが、テントの中でたまにかます疲れるジョークは山行で疲れたパーティーの雰囲気をととても和ませて(?)くれる。そういえば博多に帰ったまんま戻ってこないけどどうしたのだろう。

### 《97年度下半期を振り返って》

季節はめぐる。しかし、この2年下級生に振り回されるのは変わらない。自分が山に行きたいから行くのであって、山岳部のために登っているのではない。しかし、山岳部という枠の中で山を登るかぎり、そこから離れて登ることの難しい自分と、逆に山岳部にいることで得られる安心感や一体感がある。ここで組織論をするつもりはない。あまり深く考えまい。山岳部で山を登るということを決めてしまえば、あとは、いかに山で自分を実現できるか、ということは結局変わらない。

苦勞の多い半年間だったが、得るところもたくさんあった。立木と松田が抜けたので、大谷さんと登ることになる。もっと多くしようと思えば駒沢や千葉大と登る。組織を大きくするのが難しいので、組織を開かれたものにしていく。いろんな人と登ると、それだけ発見も多い。いい経験にもなった。

いま、大学山岳部はどこも人数不足であえいでいる状態だ。これはもう社会の流れだ、とかいってあきらめるのか。他の大学山岳部がなくなることは自分の

ところの大学山岳部にとってもマイナスだろう。結局、大学山岳部がなくなり、たとえばそれに代わるものとしてワングルなどに山をやりたいという人間が一元化されることにする。そのなかで、その組織の活動以上のことをやってみたいと思っている人間はその組織を飛び出すか、その組織の活動を多様にしていく。そこでできあがった組織は果たしてなくなってしまった山岳部とどう違うのか。その組織に今の山岳部のようなイメージが与えられるかも知れない、ということをお否定できようか。そして、山岳部と同じ運命をたどるのか。今の大学山岳部がおかれている状況は社会のせいであるかもしれないが、その社会は与えられた前提ではない。もし、与えられた枠の中でしか行動できないのであればもはや自由ではない。リアクションが必要だろう。とはいえ、山に登る人が多かれ少なかれ社会というものから離れて活動している以上、なかなかむずかしい。今は考えている。結論は出ない。

リーダー 宗像充

以上